

12月4日（水）納賀良一さん

語り始めたご本人に学ぶ ～真の医療福祉倫理を求めて～レポート

13S3007

NHKディレクター 市川 衛
医療福祉ジャーナリズム分野博士課程

「がんだから“できた”こと」

納賀良一さん。島根県益田ではじめた当事者の集まり「がんサロン」をきっかけに、島根県のがん対策を変え、医療環境も変え、そして国の政策にまで大きな影響を与えた人です。その業績は既に周知のこととなっているのに、今後も、さらなる活動を模索されています。

率直に言って、“なんでそんなに「強い」のだろう？”と思いました。がんを発症し治療することは、精神的・肉体的に生易しいことではないはずです。仕事の制限のほか治療費の負担もあり、経済的にも苦しくなります。自分の治療だけに頭が向き、「状況を変える」なんて考えもしない・・・自分ならきっと、そうなってしまいうだろうと想像します。

なぜ納賀さんは、当事者として経験した理不尽な状況を“嘆く”ばかりでなく、“変える”取り組みを始めることができたのでしょうか。講義の中で明かされる「組織作りのノウハウ」や、「行政・マスコミの“操縦”テクニック」に感服&圧倒されつつも、その疑問が常に心に引っかかっていました。

その答えは、きっと納賀さんご自身に聞くしかないとは思いますが（ネット受講のため、質問をすることが出来ませんでした）、自分なりに少し得心したと感じた瞬間がありました。講義の最後、まとめとして納賀さんがおっしゃった、次の一言を聞いた時です。

「がんになったのだから、がんから学ばなければならないと思う」

「島根だからできた。都市では埋没しちゃうことも、地方都市だと注目されるんですよ。」

がん罹患すること、地方で状況を変えようとする、ともに普通だったら、やりたいことをできなくする“壁”だと感じてしまうことです。「がんだから“できない”」「地方都市だから“できない”」ついつい、そう言ってしまうそうです。私も仕事をしていくなかで、「〇〇だからできない」という風に言い訳を考えてしまうことが良くあります。

もちろん、様々な状況の中では、がんや地方都市などの“壁”があるゆえに出来ないケースもたくさんあると思いますので、それが否定されるわけではありません。でも、「〇〇だから“できない”」と思っていたことを「〇〇だから“できる”」と変えてみたら、新たな世界が広がったり、それまでの自分ではできないようなことが可能になったりするのかもしれない。同じ状況でも、考え方ひとつでその意味は変わる。そのことに気づかされました。

将来、どうしても辛い状況に自分が置かれたときに、それを抜け出すひとつのきっかけとなるよう、今回のお話をしっかり胸に刻んでおこうと思います。貴重な気づきを頂き、本当に有難うございました。